

25journal

society&business Tokyo25 journal

執筆協力 編集室システムU okamura.nobuyoshi@gmail.com

多摩ケーブルネットワーク設立40周年 苦難のスタートから西多摩経済代表する企業へ

地域に根差した番組作りや一早くネット事業取り込む

日本初の都市型ケーブルテレビ局として誕生した多摩ケーブルネットワーク（館盛和社長、青梅市新町）が今年で設立40周年を迎えた。バブル崩壊後の経済状況や電波障害のない地域というハンデを背負い開局後10年間は赤字が続いた。だが、地域に根差した番組作りや一早くインターネット事業を取り組むなどサービスの向上に努め、契約世帯を拡大。その後は年々、安定した収益を生み出し、青梅市、西多摩経済を代表する企業に成長している。

（東京25ジャーナル・岡村信良）

1980年代の日本は、力強い経済発展を遂げていた。企業も個人も挑戦の姿勢が強かった。ヤクルトに勤めていた館氏が起業したいとの欲求が溜まっていた。

青梅市が米国レイジアナ州のラファイエット市と交流を模索する

日本初の都市型ケーブルテレビ

中で、館氏は民間の立場から協力し、現地を訪問する機会があった。そこで目の当たりにしたのが多チャンネルのケーブルテレビ。地元のニュース、スポーツのほか、様々な専門放送が流れ、視聴する誰もが熱狂していた。ケーブルテレビの

多様性が日本でも支持されるのではないかと直感。日本でケーブルテレビ局を作ろうとの思いが膨らんだ。設立に向けての資金調達はまず親戚や知人を当たった。次に地元の有力者に声をかけ、10人の発起人を集めた。40〜50代が中心で30代の館氏が最年少だった。

1983年6月に会社を設立。すぐさま開局申請に取りかかったが、壁に当たった。その頃、郵政省もケーブルテレビに関心を寄せていたが、それはビル陰などの電波障害対策や区域外再送信としてのケーブルテレビ。ビジネス、そして双方のケーブルテレビなどの考えは白紙という状態だった。

許認可事業には全てに基準があるが、ビジネスとしてのケーブルテレビにはなかった。次に地元有識者や知人を交わし、都市型ケーブルテレビについて議論。何10チャンネルも放送できる広帯域であること、一定以上のエリアであること、将来の通信に備えて双方向などを整理した。

労苦が報われたのが、1987年4月。多摩ケーブルネットワークは都市型ケーブルテレビ日本第1号として開局した。ニューメディアとしての関心を集め、NHK

テレビにはなかった。郵政省はもちろん建設省、通産省の関係も事も多く、館氏は説明に出向き、時には関連各課、各省庁担当部署と定時過ぎに酒を酌み交わし、都市型ケーブルテレビについて議論。何10チャンネルも放送できる広帯域であること、一定以上のエリアであること、将来の通信に備えて双方向などを整理した。

10年間は赤字が続いた。それでも加入者が増え、少しずつ利益が出るようになった。徐々に繰越欠損を減らし、欠損が10億になった時、95%の無償減資を断行。その減資差益と当期利益で一気に債務超過と繰越欠損を解消した。翌年から配当も開始できた。

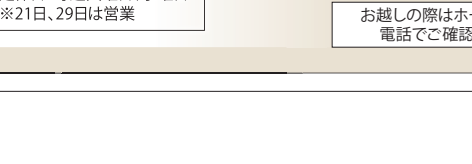
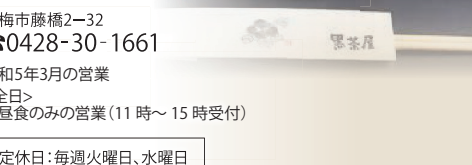
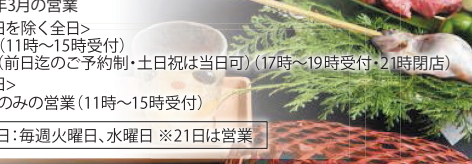
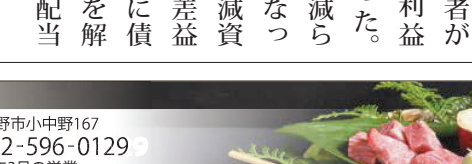
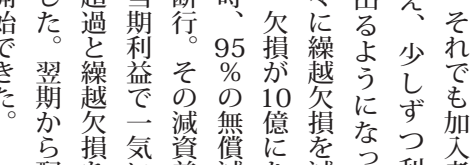
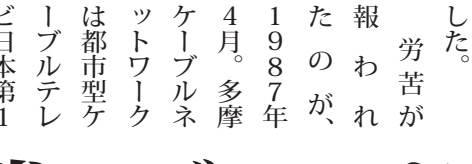
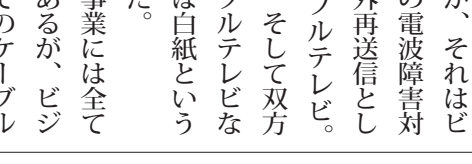
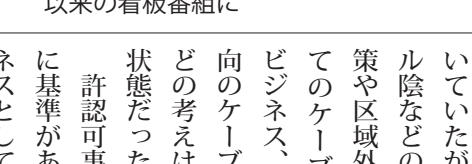
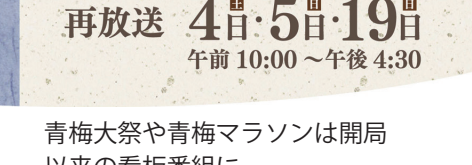
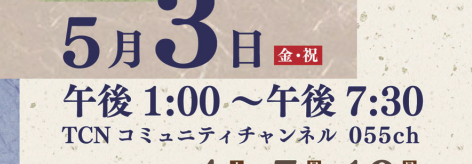
加入者増加の背景には多摩ケーブルネットワークに加入すれば、「地域のニュースが毎日見られる」と言われるほど、地域に浸透した。生活圏の情報集約は重宝され、「コミニティチャンネルだけ見られればいい」という声もあるほどだ。例えば1万9000人参加する青梅マラソンの実況中継は開局以来の看板番組。優勝争いを映すのはもちろんだが、中間ポイント、折り返し地点、ゴールなどに定点カメラを据え、出場者全員の姿を映す。参加者が帰宅後、家族と一緒に見られるよう夜も再放送を行い、1日13時間マラソンを放映する。

5月に開かれる青梅大祭の6時間半にわたる生中継も看板だ。計12の山車が青梅市の街中を曳かれるが、祭りの当日だけでなく、祭りに向けた各町内会の稽古風景もレポートする。

コミュニティチャンネルの充実に加え、飛躍を加速させたのが最高品質の提供に努力し続けたインターネットサービスの普及だった。

統合が相次ぎ、一極集中が続くケーブルテレビ業界だが、多摩ケーブルネットワークは買収の持ち掛けもすべて断った。5G時代の到来に備え、高クオリティのサービスでブランド力も高めてきた。

地域BWA（地域広帯域移動無線アクセス）の認可も得て、無線有線のインフラを揃えた。「情報化時代、地域に根差して最先端技術を活用すれば、面白いことができる」と館氏は今後を見据える。



地元のお祭りを見られるのはTCNだけ

青梅大祭

6時間半生放送

5月3日 金・祝

午後1:00～午後7:30

TCN コミュニティチャンネル 055ch

再放送 4日・5日・19日

午前10:00～午後4:30

青梅大祭や青梅マラソンは開局以来の看板番組に



館盛和社長

5G時代へブランド力高める

10年間は赤字が続いた。それでも加入者が増え、少しずつ利益が出るようになった。徐々に繰越欠損を減らし、欠損が10億になった時、95%の無償減資を断行。その減資差益と当期利益で一気に債務超過と繰越欠損を解消した。翌年から配当も開始できた。

加入者増加の背景には多摩ケーブルネットワークに加入すれば、「地域のニュースが毎日見られる」と言われるほど、地域に浸透した。生活圏の情報集約は重宝され、「コミニティチャンネルだけ見られればいい」という声もあるほどだ。例えば1万9000人参加する青梅マラソンの実況中継は開局以来の看板番組。優勝争いを映すのはもちろんだが、中間ポイント、折り返し地点、ゴールなどに定点カメラを据え、出場者全員の姿を映す。参加者が帰宅後、家族と一緒に見られるよう夜も再放送を行い、1日13時間マラソンを放映する。

5月に開かれる青梅大祭の6時間半にわたる生中継も看板だ。計12の山車が青梅市の街中を曳かれるが、祭りの当日だけでなく、祭りに向けた各町内会の稽古風景もレポートする。

コミュニティチャンネルの充実に加え、飛躍を加速させたのが最高品質の提供に努力し続けたインターネットサービスの普及だった。

統合が相次ぎ、一極集中が続くケーブルテレビ業界だが、多摩ケーブルネットワークは買収の持ち掛けもすべて断った。5G時代の到来に備え、高クオリティのサービスでブランド力も高めてきた。

黒茶屋
あきる野市小中野167
☎042-596-0129
令和5年3月の営業
<月曜日を除く全日>
ご昼食(11時～15時受付)
ご夕食(前日迄のご予約制) (17時～19時受付・21時閉店)
<月曜日>
ご昼食のみの営業(11時～15時受付)
定休日:毎週火曜日、水曜日 ※21日は営業

喰心庵
あきる野市小川633 ☎042-559-8080
令和5年3月の営業
<月曜日を除く全日> ご昼食(11時～15時受付)
ご夕食(前日迄のご予約制) (17時～19時受付・21時閉店)
<月曜日> ご昼食のみの営業(11時～15時受付)
定休日:毎週火曜日、水曜日 ※21日、29日は営業

井中居
青梅市藤橋2-32
☎0428-30-1661
令和5年3月の営業
<全日>
ご昼食のみの営業(11時～15時受付)
定休日:毎週火曜日、水曜日 ※21日、29日は営業
お越しの際はホームページが電話でご確認ください。